



■ フォトエッセイ ■

# インド人との旅

## —マトウラー編—

写真・文  
村山 真弓  
Mayumi Murayama



昨夜の雨で一気に冠水したマトウラー市内



ヴリンダーヴァンのタ立。このあと側溝の汚水と混ざった水のなかを歩く羽目になった



ヴリンダーヴァンには寺院、物乞い（特に高齢女性）、猿がとても多い

二〇一〇年六月、酷暑のデリーは夏休みの真最中で、旅行に出たり田舎の親戚を訪問したりする家族が多い。せっかくなので、私も身近なインド人の旅行について行くことにした。旅の先達は、月給五〇〇〇ルピー（約一万円）前後の人々で、貧困層ではないが生活に余裕のある人々ではない。夜行バスで限られた休みを利用し、あるいは安い時間がかかる通勤電車で旅をした。クリシュナ神やその恋人ラーダゆかりの史跡、寺院が集まるマトウラーとヴリンダーヴァンは、そんなデリー住民に人気の町である。

同行者はあるNGOの若いスタッフ三人とその家族という女性ばかり五人。ウツタル・プラデーシュ州のガジアバード駅を出発してマトウラーまで四時間一〇分をかけて走る（予定）のローカル電車は、片道二五ルピー（約五〇円）という格安の運賃で、マトウラー・ジャンクション駅には夜八時半頃到着した。到着前から雨が降っており、それまでの暑さが嘘のように寒い。停電で真っ暗な中、開いていた店で土産用に甘いお菓子（ミターイー）を買った後、スタッフの親戚の家についたのが一〇時半、冷えた身体を入れてもらったチャイ（ミルクティ）で暖め、部屋を占領している三台のチャールパーイー（「四脚」の意味の簡易ベッド。



旅の始まり。デリー・シャードラ駅

本梓にロープがはってある）に親戚の子供二人と皆で折り重なるように寝た。  
翌朝、水浴びと朝食の後八時頃に親戚の兄妹も一緒に寺院巡りに出発した。昨日の雨であちこち冠水している。マトウラー市内のクリシュナ神の生誕地に立てられたという寺院を皮切りに、グリーンダーヴァンの四〇〇〇以上あるという寺院のうち代表的な所を六カ所も回ったろうか、最後はもう日も暮れて真っ暗になった。

から二一キロを裸足で歩くという。他の皆は店に荷物とサンダルを預けたが、私は自信が全く無かったので裸足はやめておいた（特別整備されているわけでもない、全く普通のインドの道なのだ）。この宗教儀式はパリクラマー (parikrama、「周回」の意) という。寺院の建物の周りを回ったり、ヒンドゥー教徒の結婚式で、花嫁と花婿が聖火を回ったりするのもパリクラマーだ。インドには幾つか有名なパリクラマーの道がある。  
雷と雨を支配する神インドラから民や家畜を守るために、クリシュナ神が傘のように持



クリシュナ神生誕地寺院。中は警備が厳しくカメラ、携帯、バックの持ち込み禁止



親戚の家で水浴び開始

クリシュナ神が持ち上げている山がゴヴァルダン丘陵



ラージャスターン州からの参拝者



ち上げた山ゴヴァルダン丘陵を回るパリクラマーは、その一つだそう。これらは後から仕入れた知識で、その夜はわけがわからないまま、二キロ歩くとクリシュナ神ゆかりの何か(寺?)に到達するらしいとだけ理解して最初の一步を踏み出した。

出発したのが夜九時くらい、当然真っ暗である。所々に夜通し開いている茶屋や宗教グッズを売る店がある。集落もあったが、全て戸を閉ざしていた。街灯のないところは真っ暗で、サルや野生の孔雀の泣き声が聞こえる。一人で黙々と歩いている人もいれば、大声で歌ったり、笑ったりしながら、時折走っていく元気な若者達や家族連れもいる。夏休みということもあり、相当の人数がこの夜、

同じ道を歩いたようだ。

丘陵といっても最高部で海拔二五メートルしかないの、ほぼ平らな道をただただ歩く。暗いので周りの景色を見て気が紛れるということもない。途中眠いし、疲れたしで、何度も休んでチャイを飲んだ。最初は神への賛歌を元気に歌っていた同行者も、だんだん無口になり、石がごろごろして足元が悪い時など、「ハレ・ラーム、ハレ・クリシュナ」などと神の名前を口にして痛みに耐えていた。私もつらい時は真似して、神様に加えて家族の名前を呼んでみた。『パリクラマー最後の一步』と書いた看板を見たのは、朝五時頃で、空は既に明るくなり始めていた。この時まで、私はパリクラマーが一周を意味すると



夜中12時、さすがに疲れた表情のラーニーとミヌー

専門は南アジア地域研究、ジェンダーと開発、労働問題、社会開発。  
近著に、*Gender and Development: The Japanese Experience in Comparative Perspective*, Palgrave Macmillan, 2005 (編著), *Globalization, Employment and Mobility: South Asian Experience*, Palgrave Macmillan, 2008 (共編著)などがある。

バリクラマーの最終ゴールの寺院



は知らず、ゴールの寺か何かがあり、また同じ距離を戻ってくるものだと思っていたので、真実を知ったときはものすごく嬉しかった。最終ゴールは、出発前にも外から眺めた寺院だった。店で供物を買ってお参りする。とりあえず歩き通したという達成感はあったが、最後のお寺は、お祈りの種類と値段が書いてあり、どちらかというと現世感たっぷり場所だった。

旅は続き、朝帰りした後、お茶をもらい昨

晩のように着の身着のまま昼の一時頃まで寝た。起きた後、順番に水浴びし、チャパティと野菜のカレーと大根のアチャール(漬物)

のお昼ご飯をいただく。この家のチャパティはとてもおいしい。手回しのミシンでクルタやサリーブラウスの仕立てなどもする奥さん、シータさんは、器用で働き者だ。

午後三時頃、お世話になったこの家族に別れを告げる。その時、シータさんが私も含め全員にお金(五〇ルピー)をくれた。驚いたが、客への尊敬を示す習慣だよと言われ、お返しに、私も子供たちにお金を渡した。バスに乗って別の親戚を訪問した後、アリーガル駅まで移動し、夜九時頃に到着したニューデリー駅行き電車をつかまえた。見るとオリッサ州のプリーからの長距離電車だった。二等の普通車両は床から天井近くまでどこも一杯で、九割方乗客は男性である。しかし女性も六人固まると強い。満杯の席に無理やりお尻を押し込んで、全員座ることができた。

他の皆と別れて私は家に近いニザムッディン駅で降りるつもりになっていた。しかし途中で思っていた路線と違うことがわかり、急遽、彼女たちの家で迎えるまで待たしてもらうことにした。ガジアバード駅についてのが夜一時過ぎだったろうか。やれやれと思う間もなく、そこから彼女達の住む隣町のスンデルナグリに移動するのが、また大変だった。州が違うので直接行ってくれるオートリキシャが見つからない。しかも夜トラックが大量移動するこの道路はすごい渋滞で、スンデルナグリまで二時間近くかかってしまった。そこから家まで、昼間だと一時間の道だが、さすがに真夜中はすいていて三〇分ほどで自宅に着いた。

ようやく、短くて、長い旅が終わった。



アリーガル駅でデリー行きの電車を待つ



シータさんの手動ミシン。サリー用のブラウスを仕立てている